



季節を知ったら  
暮らしが楽しくなった

〜第二二五号〜

穀雨こくう

四月二十日

## 雨宝童子像

伊勢志摩サミット開催を記念した「伊勢志摩<sup>とこよ</sup>常世の浪の重浪<sup>しきなみ</sup>よする国へ、いぎNOW!」が津市の三重県総合博物館で始まりました。伊勢志摩地域の国宝や重文などが一堂に集められ、朝熊山金剛證寺の木造雨宝童子立像も展示される貴重な機会となっています。

雨宝童子は、天照大神<sup>あまてらすおみかみ</sup>が天上界から日向国<sup>ひゅうがのくに</sup>（宮崎県）へ下向<sup>げこう</sup>された際のお姿とされ、金剛證寺のものは平安時代作で国の重要文化財となっています。ふだんは宝物館に保管され、特別な時しか見ることはできません。

そのお姿は、像高一メートルあまりと小さく、頭に五輪塔を頂き、長い髪を垂らしています。寺では弘法大師<sup>こうぼうだいし</sup>が天照大神十六歳の姿を感得し、一刀三礼<sup>いちとうさんらい</sup>（一刀ごと三度礼をする）して彫ったと伝えます。

もともと神は見えない存在ですが、仏教が日本に入ると仏像に倣<sup>なら</sup>って、こうした神像<sup>しんぞう</sup>が製作されるようになりました。それにしても、天照大神は神名の通り、天地をあまねく照らす光のようなご神徳とされるのに、雨と付く雨宝童子とは意外に思いますが、これは雨宝童子が天照大神の本地仏<sup>ほんじぶつ</sup>である大日如来<sup>だいによらい</sup>が姿を変えたものともされるからです。古来、太陽光も雨も天からの恵みと考えたから、結びついたのでしょうか。

朝熊山は江戸時代、「朝熊かけねば片参り」と言われ、内宮参拝をした後に朝熊山に登りました。そして、参拝者は雨宝童子像が刷られた仏画<sup>ぶつが</sup>を授かったと寺ではいいます。おそらく境内の池畔に建つ雨宝堂に安置された雨宝童子像に人々は手を合わせ、仏画を土産としたのでしょう。目に見えない神の替わりに、雨宝童子像は目に見える天照大神として信仰されたのです。この企画展は六月十九日まで。

